

# 地域の課題 研究者も考えます

22

ICT・交通



柿元 祐史助教

## 道路ごと異なる機能、意識を



住宅地への入り口では速度抑制を促す構造で機能を明確に（ドイツ郊外の事例）

通学路を利用する児童を襲う交通事故が後を絶たず、より一層の交通安全対策・取り組みが求められている。このような事故は、主にドライバーの不安全行動が原因であるが、日常の道路利用とも少なからず関わりがある。

道路には利用者の交通に関する機能として、通行、アクセス、滞留が存在する。自動車の観点から、通行機能は安全・円滑・快適に通行できる機能、アクセス機能は沿道施設に容易に出入りできる機能、滞留機能は駐停車できる機能一である。

まちを見渡すと、どんな車両でも通行でき、どこへでも出入りができ、どこでも駐停車できる、多機能な道路が多く整備されていることがわか

## 無秩序な利用 事故誘発

る。機能の違いがほとんどない場合、道路利用者は、まちの外へつながらる国道も、住宅の前を通る県道も、通学路指定の市道も、同じ道路に感じてしまう。

本来国道と通学路指定の市道で道路の機能は異なるが、道路利用は同じとなっているのが現状である。このような道路利用が、大型車両の住宅地への進入や速度の高い車両の通学路走行を誘発させ、悲惨な事故を生む要因となっていると考えられる。

安全な道路交通環境の実現に向けて、それぞれの道路に求める機能を明確にし、機能に応じた道路利用を促すために必要な道路の条件を示すことが研究者としての責務であろう。利用者は、「実際の交通規制に従って走行」するのはもちろんのこと「道路の機能を意識して走行」することで、交通安全に取り組んではいかだろうか。

名古屋大学持続的共発展教育研究センター